

やってはいけないこととして、その行為を止められ、発露しないようにとしつけられる子どもたちがいる。子どもが子どもとしてある、その自然な姿が大人社会の価値観で強く否定される。網野歴

史学は、大人の社会が「悪」ととらえるものには、人の自然性や野性の発露が含まれるということに気づかせてくれる。

(武蔵野大学)

マイ・ディアー一人のへ女の子へ

菅 聡子

子どもの頃、私はスウェーデン人になりたかった。ヘアストリッド・リンドグレーンの国の人になりたかったのだ。初めてリンドグレーンの作

品にふれたのは、小学校低学年の頃だ。クリスマス朝、目が覚めると枕元に『長くつ下のピッピ』(大塚勇三訳、岩波書店)が置かれていた。

一読して夢中になり、以後、ことあるごとに親にねだって、当時岩波書店から出版されていたリンドグリーン作品を読破した。だが、どうもリンドグリーン作品はさらに何冊もあるらしい。子どもなりにそう気づいたが、手に入れる方法がない（当時はまだ数冊しか翻訳されていなかった）。そこで、「スウェーデン人になりたい！」と短絡的に思ったのだった。

だが先日、三瓶恵子『ピッピの生みの親 アストリッド・リンドグリーン』（岩波書店、一九九九）を読んで、『長くつ下のピッピ』が書かれたのが一九四五年であることを知り、私は少々衝撃を受けた。日本が帝国主義・軍国主義のはての敗戦を迎えていたとき、はるかスウェーデンの地では、すでに「世界一つよい女の子」が誕生していたのだ。もちろん、現在の知見からは、ピッピといえども人種差別的視線から自由ではないことが

指摘されもしているが、しかし、のちに日本の少女たちをエンカレッジすることになる「世界一つよい女の子」がまさに一九四五年に生まれていたことは、決して偶然とは思えない。

三瓶氏の著書によれば、リンドグリーンは一九七〇年代以降、社会批評家としても活躍している。一九七六年、総選挙を前に、政府が提示していた「限界所得税の課税方式」のおかしさを、「ボンペリポッサ物語」という寓話の形で新聞紙上に発表し、たちまち国中の反響を呼んだのである。リンドグリーンは一九〇七年生まれだから、このときすでに七十歳になるうとしている。そして以後、積極的に社会的発言を行っているのである。なんとも元気な「おばあちゃま」ではないか。リンドグリーンの大ファンを公言していた私であるが、実はこれまで、リンドグリーンその人についてはほとんど何も知らなかった。三瓶氏の

著書を通じて知ることのできたリンドグレーンの姿は、私がイメージしていたリンドグレーン像をはるかに凌駕する、魅力的なものだった。

だが、作者の実像が、作品を読んでイメージしていたそれと大きく異なることもある。小倉千加子『赤毛のアン』の秘密』（岩波書店、二〇〇

四）を読んでもっとも驚いたのは、作者ルー

シー・モード・モンゴメリの死が自殺であったことだ。ただ、『炉辺荘のアン』が絶筆だったと知って、妙に納得がいったのも確かである。多くの日本人女性のご多分にもれず、私もヘアン・シリーズの一〇冊を繰り返し読んだクチであるが、『炉辺荘のアン』の読後感は、けっして心地よいものではなく、なんとなく不穏なものを感じたからである。それはおそらく、家庭の主婦としてのアンの姿に、なにか破綻の影を感じたからかもしれない。なによりアン自身が、自らを偽っている

ような印象を受けるのである。

もっとも、私が愛したアンは、厳密に言えば第一作のアンなのだった。初対面のときからその旺盛なおしゃべりではにかみやのマシユウを魅了し、目の前の風景を「歓喜の白路」「輝く湖水」と名づけるアン。自らの「赤毛」に対するコンプレックスを正直に告白するアン。日常的な騒動を起こしつつ、マリヤやリンド夫人を次々と味方につけていくアン。ダイアナと「腹心の友」の誓いかわし、へ女の子と土士の友情を実践してみせるアン。へ女の敵は女を標榜したのはショウペ



ンハウアーだが、アンの住む世界では、女性同士の信頼と友情がその基盤にあった。

ただ、第一作においても、このようなアンが徐々にいわば飼いやられていき、へ良妻賢母的な女性へと教育されていく過程が描かれていても読める。現在のフェミニズム批評においては、たとえばマッシュウの女性化によって可能となるシスターフッドの世界のなかで、アンが当時の常識的な女性像へと回収されていく点に、この作品の限界が指摘されもしている。第一作が書かれたのが一九〇八年であることを思えば、そのような時代のコードが物語構造に内在するのはいたしかたない。西洋文化においては、へ赤毛へは秩序からの逸脱を示す記号だそうだが、アンの髪の毛が、成長するにしたがって茶褐色へと近づいていくのもむべなるかな、と言えるだろう。

だが、作品の末尾近くでマッシュウが言う、「わ

しには十二人の男の子よりもお前一人のほうがいいよ」という言葉は、永遠にへ女の子へたちを力づける。「いいかい？—十二人の男の子よりいいんだからね。そうさな、エイヴリーの奨学金をとったのは男の子じゃなくて、女の子ではなかったかな？ 女の子だったじゃないか—わしの娘じゃないか—わしのじまんの娘じゃないか」。リンドグレンは赤毛のアンの大ファンで、ピッピのイメージはアンから来ているという。想像力が豊かで、マリラやマッシュウの生活に大きな喜びをもたらしたアンは、やがて「世界一つよい女の子」。ピッピを生み出した。そしてピッピに元気づけられた読者たちはまた、次の物語を生み出していくに違いない。

（お茶の水女子大学）

*本文引用は『赤毛のアン』（村岡花子訳、新潮文庫）による。